

## 『駿遠へ移住した徳川家臣団』における岡田清直・岡田錠次郎の謎（その2）

The Re-examination on the brief history of OKADA Kiyonao/OKADA Jyojiro in MAEDA's book, vol;2

小栗 勝也\*  
Katsuya OGURI

（承前、「3. 資料ごとの調査結果」の続き。注の番号も継承）

**No.3 の『静岡御役人附』**について前田氏は、第1編では明治3年3月作成、静岡県立図書館所蔵と、第3編では、静岡県史史料編一六、静岡県立中央図書館蔵と記している。

結論から先に言うと、単体の資料としては、明治3年3月に作られた『静岡御役人附』は静岡県立図書館には存在せず、明治2年の『静岡御役人附』が静岡県立中央図書館のデジタルライブラリーで公開されている。しかし、『静岡県史 資料編16 近現代一』（前田氏は「史料編」と記したが、「資料編」が正しい）には明治3年3月の「静岡御役人附」が収録されており、この県史は県立中央図書館にも収蔵されている。従って、前田氏が依拠した資料は、『静岡県史 資料編』所収の「静岡御役人附」のことであり、それを静岡県立中央図書館の蔵書で見たということになろう。

調査の結果、前田氏が見ていない、明治2年の『静岡御役人附』も発見できたので、ついでながら、その資料から先に紹介することにしたい。

静岡県立中央図書館のデジタルライブラリーにある『静岡御役人附』は、元々、富士市立図書館所蔵のものであり、それを静岡県立中央図書館デジタルライブラリーでも公開する形が取られている。また、早稲田大学図書館にも同じ資料が所蔵されており、これも同大図書館のWEB上で公開されているので、どちらで確認してもらってもよい。共に表紙の左端に『静岡御役人附 全』とある。

この資料の44丁の左端から始まる「横須賀勤番組」のリストの中で、「世話役」の最後から3番目に「岡田錠次郎」の名がある（45丁の左側）。但し、就任や退任等の時期、および資料そのものが作られた時期に関しては、この資料には何の記載もない。静岡県立中央図書館デジタルライブラリーでは、この資料に対して、「明治2」年の刊行と登録されているが、なぜ明治2年と推定できたのかについては説明が一切ない。早稲田大学図書館の書誌情報では

「出版年不明」となっている。

この明治2年という時期に関して、重要な補足情報を以下に記しておきたい。前掲**No.1**の③で記した通り、明治2年正月か2月発行の『駿藩各所分配姓名録』では、岡田は浜松の中に位置付けられていたが、同じ明治2年（根拠は不明）の『静岡御役人附』では横須賀勤番組に配属されている。遠州の横須賀は、現在では掛川市の一部になっているが、旧・浅羽町の東隣に存在した横須賀藩の本拠地のことである。

岡田が浜松の分配になったのが明治2年の初めであったとしても、彼が本当に浜松に居たかどうかは別に考える必要がある。なぜなら、樋口雄彦氏が指摘しているように、『駿藩各所分配姓名録』に記されている分配地域に居住していないことが確実な事例が幾つもあるからである。樋口氏は、その人物が実際に分配先に転居し、居住したかどうかは疑わしく、「あくまで名義上の割付地・配置先を示したものと考えるべきである、と述べている<sup>(2)</sup>。従って、岡田の場合も、本当に浜松に移ったかどうかは定かではなく、名目上の分配先が浜松であったというだけの可能性もある。

その岡田が、同じ明治2年に刊行されたとされる『静岡御役人附』では、横須賀勤番組の世話役として記録されている。この時の世話役は、1人で藩士50人程の世話をする立場にあり、世話役頭取の下、世話役助の上に位置付けられるから<sup>(3)</sup>、今日的感覚で言えば中間管理職の官吏である。

静岡藩が、領地である駿河・遠江地域を9つに分け、それぞれの領内に、このような勤番組統治の仕組みを置いたのが明治2年9月であるから<sup>(4)</sup>、勤番組の記載がある『静岡御役人附』は明治2年9月以降に出版されたはずである。その意味で、明治2年刊行という静岡県立中央図書館デジタルライブラリーの登録情報は、根拠は明示されていないものの、あながち間違っていない。

以上のことから分かることは、岡田錠次郎は明治2年初

めの『駿藩各所分配姓名録』では名目的には浜松に分配されていたが、浜松での勤務実態があったかは疑わしいこと、更に同年9月以降の静岡藩再編成後には、横須賀勤番組に配属され、そのことが『静岡御役人附』に記録されているという事実である。横須賀での岡田は、勤番組の世話役として50人程の部下の世話をしなければならなかったはずなので、間違いなく横須賀に居住していたと想像される。

横須賀勤番組世話役に任命される前までは、彼がどこで何をしていたかは、正確には不明ということになるが、もしかすると明治2年の9月よりも前から横須賀に居た可能性はないであろうか。唯一、明確に言えることは、徳川家臣団の移封により、遠州地域に移る予定の集団の中にいたことだけは確かである。そうでなければ分配姓名録に名前が記載されるはずはないからである。

次に、実際に前田氏が見た『静岡県史 資料編 16 近現代一』(平成元年3月22日、編集発行・静岡県)を筆者自身の蔵書で確認した所、105頁以下に収録されている「83 静岡藩職員録(明治3・3月末)」の冒頭に、「静岡県立中央図書館所蔵「静岡御役人附」(横長)」という説明があることが分かった。静岡県史の資料編にある「静岡御役人附」の資料名はこれだけであるので、前田氏が見たものは間違いなくこれであると断定できる。

これを見ると、時期だけが翌3年3月のもので、上記の『静岡御役人附』より後の刊行になるけれども、中身は同じである。ここにも上記と同じ岡田錠次郎の情報が記されている(126頁)。従って岡田は、明治2年9月から横須賀勤番組世話役となり、翌明治3年3月時点でも同じ職を務めていたことが分かる。

ところで、前掲表2中の【K】の箇所、岡田が明治2年に横須賀勤番組世話役であったことを前田氏は記しているが、その根拠となった資料がこれであったことになる。但し、前田氏は明治2年の『静岡御役人附』は見えておらず、明治3年3月の『静岡御役人附』を見ただけである。しかし、横須賀勤番組世話役であった時期について前田氏は参考にした資料の発行時期から明治3年3月とは記さず、明治2年と記している。明治3年3月の「静岡御役人附」を見ただけでは、明治2年に横須賀勤番組世話役に就いていたことを説明することはできない。従って、明治2年という時期を前田氏が記せたのは、別の情報から、静岡藩が勤番組へ再編成した時期が明治2年9月であることを前田氏が承知していたからに違いない。明治3年3月の資料でも、岡田は同じ横須賀勤番組世話役であったので、明治2年だけでなく明治3年という時期も経歴中に記してよいはずであるが、前田氏はそのようには書いていない。なぜ書かなかったのかは不明であるが、新しく就任した時期だけに経歴を限定したのかもしれない。

なお岡田清直に関しては、「静岡御役人附」では何も記載がなかった。

**No.4の『沼津御役人附』**は、沼津市立図書館に所蔵されているのを見た。但し、同図書館の資料は、「明治初年に作製された徳川藩の「沼津御役人附 全」の復刻本」であり、昭和55年3月30日に沼津市立駿河図書館の編集・発行で、「図書館郷土資料叢書11」として発行されたものである。同図書館の登録タイトルも『沼津御役人附 全』であり、「全」の文字がある。前田氏の本では、第1編では「全」はなかったが、第3編ではこれが付されている。

同資料では、沼津勤番組の「拾巻番類」の「世話役」として「岡田孝三」(26頁)、同じ「拾巻番類」の「同介」(「世話役」の「介」<補佐役>の意味…小栗注)として「岡田八郎」(27頁)の名が記されている。「類」とは、当時の沼津で用いられていたグループの単位を示す名称のようである。さらに沼津勤番組の「拾六番類」の「同介」(上記と同じ)として「岡田鑛三郎」がある(31頁)。また「沼津兵学校」の「資業生」の1人として「岡田顯次郎」(42頁)があり、彼は「第三期」「明治二年六月四日五日及第」(41頁)。この部分は手書きで追記された模様の一員である。同じく資業生で「第四期」「明治二年九月十一日十五日及第」(43頁。同)の一員として「岡田鉦八郎」(44頁)があった。加えて、沼津の「小学校役々」の中に「素読」の担当者の1人として「岡田隆三」の名が記されている(48頁)。

この資料に記載されている岡田姓の人間は以上であり、岡田清直・錠次郎はなかった。

**No.5の「静岡学問所局」**は、前田氏自身が「雑誌「同方会誌」掲載」と記しているので、筆者も『同方会誌』により確認した。『同方会誌』については後掲**No.34**の所で紹介するので詳細はここでは略し、結論のみを記す。昭和52年の再復刻版『同方会誌』の合本第7巻に「静岡学問所局」(従って、凡例にある「静岡学問局」の名は間違いであると分かる)のリストが掲載されており、内容は学問所局の教員名簿である。そこには、岡田清直・錠次郎の情報はなかった。

**No.6の「御入国御人数町宿帳」**については、前田氏は「原本静岡県立中央図書館 静岡市史(近代史料)より抜粋」と記している。原本は県立中央図書館にあるが、それが静岡市史(近代史料)に掲載されているように読める。「抜粋」とあるが、文章通りに読めば、「静岡市史(近代史料)」「より」、前田氏または別人が必要部分のみを抜粋した資料という意味になり、資料全体ではないことになる。しかし、この資料を更に「抜粋」する必要性がどこにあるのか分からない。それ故、誰が、なぜ「抜粋」したのか、また前田氏がなぜそう記したのかは筆者には全く分からない。

この資料については、前田氏の記述から『静岡市史』に資料が掲載されていると判断できるので、筆者はそれを探した。すると磐田市立中央図書館に『静岡市史 近代史料』(同書奥付では「静岡市史・近代史料」とあり、「・」が付

されている。昭和44年4月1日、編集発行・静岡市)が所蔵されていることがわかり、同図書館でこれを見た。同書の190頁以下に「〔七〕御入国御人数町宿帳」が掲載されていた。この「町宿帳」について、同書では「静岡県立葵文庫」明治二年五月現在」と記されている(190頁)。いろは順に氏名が記載された資料である。このうち、212頁から始まる「お之部」に収録された岡田姓の人間は、「岡田助次郎」(216頁)、「岡田鶴川」、「岡田孝之丞」、「岡田繁太郎／(朱書鷹匠町<sup>江</sup>引移)」(以上216頁。なお「／」は小栗が付したもので改行を意味する。以下も同じ)、「生徒／岡田与八」(217頁)、「岡田孝平」、「岡田甲子太郎」(以上220頁)のみである。この資料にも、岡田清直・錠次郎の情報はなかった。

**No.7の『駿府藩役人名鑑』**は、前田氏は第1巻では左のように資料名を記していたが、第3編では『駿藩役人名鑑』とし、「府」の1字を削除している。「駿府藩役人名鑑」でも「駿藩役人名鑑」でも、その名を冠する資料をなかなか見つけられなかった。前田氏は静岡県立中央図書館蔵と記しており、氏はそこで見たと解釈できるが、県立中央図書館の蔵書には該当のものが存在しなかった。諦めかけていたところ、比較的最近になって「駿藩役人名鑑」の名の資料を収録している文献を見つけることができた。『徳川幕府大名旗本役職武鑑 四』(「大名旗本」の部分は分かち書き。渡辺一郎編、柏書房、1967年6月30日)がそれである。筆者は、静岡大学附属図書館に所蔵されている同書を、静岡理科大学附属図書館を通じて相互貸借の形で取り寄せてもらい、理工科大学図書館内のみで閲覧した。

この本には、「駿藩役人名鑑」の名の資料が影印で2点収録されていた。いずれも木版刷りの1枚物であるが、見開き2頁分で全てが収まるように、それぞれが収録されている。初めの「駿藩役人名鑑」(これを①とする)は明治元年の「正月十三日御役替」と記されたものなので、前田氏が参照した資料とは年が異なる。なぜなら前田氏はこの資料について、「明治二年一月学問所御用製本所本屋市蔵板元」、または「学問所御用製本所駿府江川町本屋市蔵」と記していた。それに該当するのが、2つ目の「駿藩役人名鑑」(②とする)である。

②は御家老の平岡丹波から始まり、一番左下に置かれた陸軍御用重立取扱の江原三介までを記した一覧表で、縮小した画像として収録されている。枠の欄外右肩に「明治二<sup>年</sup>正月新刻毎月改」と刻されており、また、枠の欄外左下隅には「学問所御用製本所 駿府江川町 板元 本屋市蔵 彫工 成文堂」(駿府～成文堂は3行の分かち書き)とある。「板元」は、はじめ「版元」の間違いではないかと思ったが、実際の資料に「板元」と記されているので、間違いではない。

また、収録されている872頁の一番右肩の部分には「駿藩役人名鑑 明治二年／一八六九年」(ここの「／」は小

栗によるものではなく、本書にその通り記されている)と書かれているが、このみは活字であり、元の木版とは明らかに異なるため、本書の編者が置いたものと分かる。元の刷り物には「駿藩役人名鑑」という文字はどこにもない。従って、この名は編者が便宜的に付けたものと考えられる。

ここには岡田姓の人間は、御目付の岡田斧五郎と、肩書き部分が読めないが岡田昌碩、学問所局の五等教授・岡田主税の3人を確認できるだけで、岡田清直・錠次郎の情報はなかった。ちなみに①の資料にも岡田の情報はなかった。

ところで、前田氏がこの資料を参考にしたのなら、なぜ収録文献である『徳川幕府大名旗本役職武鑑』の名を記さないのであろうか。他では収録文献を記すこともあるので、ここに記載がないのは不可解である。所蔵場所として静岡県立中央図書館の文字を前田氏は記している(第3編)が、『徳川幕府大名旗本役職武鑑』も同館に収録されているので、前田氏がそこでこれを見た可能性はあり得る。しかし、それならば『徳川幕府大名旗本役職武鑑』の名をなぜ記さないのであろうか。『徳川幕府大名旗本役職武鑑』の書名だけでは、その中に「駿藩役人名鑑」が収録されていることは分からないので、「駿藩役人名鑑」という資料名から、この書に辿り着くのは難しい。

そこで、あくまでも想像であるが、もしかすると前田氏は、「駿藩役人名鑑」あるいは「駿府藩役人名鑑」の名を持つ資料を見ていないのではないかと考えた。実際に見たものは別の名の資料であって、資料名を記す際に誤って記したのではなからうか。そう考える理由の第1は、本稿で示す通り、前田氏は資料の誤記を幾つもしていること、第2は、静岡県立中央図書館には、同じ明治2年1月のもので、前田氏が記す文献名と似た、別の単体資料が存在しているからである。

すなわち『明治二<sup>年</sup>正月新刻駿府藩官員録』(③とする)、『駿藩役名便覧 明治二<sup>年</sup>正月改以来毎月改』(④とする)の2つである。共に前田氏が参考文献として記していない資料であり、これらのどれかを見たものの、資料名を誤って記した可能性があるかもしれない。

③については、筆者は静岡県立中央図書館の蔵書と浜松市立中央図書館の蔵書の2種類を確認している。県立中央図書館のものは、静岡県立葵文庫の資料を手書きで書き写したものをコピーし、冊子状に綴じた物が書架に配架されていた。同じもののコピー製本資料が浜松市立中央図書館にも所蔵されている。内容は同一である。

この資料は、「静岡県立葵文庫」と印刷された専用の罫紙にペン書きで関係人物名を記入した私製の文書が大元の資料であり、それをコピーして製本したものが両図書館に所蔵されている。葵文庫は現在の静岡県立中央図書館のことである。薄い冊子資料である。

この資料の表紙には、静岡県立中央図書館のものは、表紙中央に「明治二<sup>年</sup>正月新刻 駿府藩官員録」(「新刻」の部分までは分かち書き)とあり、左下に「静岡県立葵文

庫」と記されている。浜松市立中央図書館のものは、中央部分の表題に『明治二<sup>ニ</sup>年正月新刻 駿府藩官員録』とあり、二重括弧が付されている以外は、県立中央図書館のものと同じである。いずれの表紙も手書きである。また、元資料の扉に相当する場所には、「駿府江川町学問所御用製本所／本屋市蔵版ニヨル」（「／」は小栗が付したもので改行を意味する）とある。

収蔵場所が元々は静岡県立中央図書館の葵文庫であること、明治2年1月という発行の時期、および「学問所御用製本所」、「駿府江川町」、「本屋市蔵版」の文字は、順序が一部異なるもの前田氏が記す情報と合致する。従って、前田氏が見たものは、本当はこれであるが、資料名を誤記したのではないかと想像することもできる。しかし証拠がないので、その想像が正しいか否かは分からない。

資料の中身を確認すると、御家老の平岡丹波から始まる人物の並びは②と全く同じであり、江原三介のあとには、②では欄外に置かれていた追加の人物情報も続けて記されていた。中身が同じであるから当然のことながら、③においても岡田姓の間人は、「御目付」の1人として「岡田斧五郎」が、また「奥医師」「御雇」の「岡田昌碩」、さらに「学問所局」「五等教授」の「岡田主税」の3名であり、②の資料から判読できた3名とまったく同一である。岡田清直・錠次郎はなかった。

さらに、④の『駿藩役名便覧 明治2<sup>ニ</sup>年正月改以来毎月改』も静岡県立中央図書館で確認した。この資料は1枚の刷り物で、封筒のような外袋の中に折りたたまれた形で保存されている。こちらは閉架式書庫で保管されていた。これを見ると、外袋の表の右に「明治二<sup>ニ</sup>年正月改／以来毎月改」（「／」は小栗が記したもので、改行を意味する）と記され、中央に「駿藩役名便覧」（「駿藩」は分かち書き）と書かれている。中にある1枚ものの現物には、右肩に「明治二<sup>ニ</sup>年正月新刻毎月改」と書かれているだけで、外袋にあった「駿藩役名便覧」の文字はない。

内容は、これも上記②と同じものである。但し、唯一異なる点があり、1枚物の刷り物の右下に、追記された人物を記した紙片が糊付されている。追記部分には、「二月一日御役」として「水利路程方」として「川上服二郎」以下十数名と「府中湊奉行」の山田虎次郎の名があるのみで、岡田はない。

なお、②の資料を見た時に、右下あたりに黒く塗りつぶされている四角い部分があり、なぜそのようなになっているのか不思議であった。不都合なものを後に墨で塗りつぶしたのか、あるいは切り取られているために黒く見えるのか、どちらかではないかと想像していた。しかし、④の実物を見たところ、後から塗られているのでもなければ、切り取られているのでもないことが分かった。その四角の部分は、文字を刷った時の墨の濃さのまま、そのまま黒くなっていたからである。理由は不明だが、その部分は版木の元の高さまで木材を残したか追加したことによって生じたも

のと思われる。修正したということであろうか。

更に付け加えると、この④の資料は、静岡県史編さん収集資料検索システムのサイトで検索すると、WEB画像として見る事ができる。右下の黒い四角の部分も、下部の追記の紙片も確認できる。しかし、画像が荒いので、どんなに拡大しても、ここでは中の文字を鮮明に読むことができない。また、同じ画像が、『静岡県史 別編3 図説静岡県史』（編集・発行＝静岡県、平成10年2月27日。掛川市立中央図書館で確認）の208頁にも掲載されているが、この写真も小さすぎて中身を確認できない。中身を確認するには②か④によるしかないが、実物であるが故に④の方が鮮明である。

なお、④の『駿藩役名便覧』については、同じ名の資料が、早稲田大学図書館に収蔵されており、しかもデジタルデータがWEB上で一般公開されている（これを⑤とする）。同大学図書館に登録されている書誌情報では、時期不明の「書写資料」で、「松下菴主人（写）」とある。本体をデジタルデータで確認した所、横長の冊子体資料であるので、1枚の刷り物である④とは明らかに形状が異なる。

⑤では、扉部分と1枚目の冒頭に「明治二<sup>ニ</sup>年正月新刻毎月改」「駿藩役名便覧」（「駿府」のみ分かち書き）と記されている。内容は「御家老」の「平岡丹波」から始まり、陸軍御用重立取扱の江原三介までが記されており、「本屋市蔵」「成文堂」の文字も肩書き住所とも、②の『徳川幕府大名旗本役職武鑑 四』の収録資料と同じように記されている。また、末尾の余白に朱書きで「松下菴主人」の署名と共に、「右之本書ハ一枚摺也」、「江戸エハ多分も有間敷との事」なので之を写して本書は江戸へ送った事が書かれている。元の1枚刷りの資料は江戸に送り返し、控えとして、書き写したのがこれであると理解できる。

以上のことから⑤は、②、④と形状は違っているものの、明らかに同じ内容のものであると断定できる実質的に同一の資料が幾つも存在するのは、元の1枚刷り資料に正式の題名が無かった為であると想像される。

以上①～⑤の全てにおいて、岡田清直・錠次郎の情報は皆無であった。

**No.8の『駿府表へ召連候家来姓名録』**について前田氏は、第1編で前田氏は国立公文書館蔵と記し、第3編（ここでは「姓名簿」とあるが「簿」は誤り）では、内閣文庫の原本を池沢氏が写したものが静岡県立中央図書館にあると記している。しかしながら、国立公文書館デジタルアーカイブから蔵書を検索しても当該資料はヒットせず、静岡県立中央図書館でのみ所蔵を確認できた。そこには『駿河表之召連候家来姓名録』（池沢政太郎著、1978年。これを①とする）と、同じ書名の「五十音別分類」（池沢政太郎著、1978年。これを②とする）が該当した。また、浜松市立中央図書館にも『明治元年駿河表之召連候家来姓名録』（これを③とする）が所蔵されていた。筆者は①～③の全部を

見たが、③は①のコピーであり、どちらかを見れば十分である。②は50音別になっているので人物を探すのは、こちらが早い。すべて池沢政太郎氏によって手書きで書かれた文書をコピーして冊子化した資料である。

この資料について記すべきことが幾つかある。

まず、資料名についてであるが、静岡県内の両図書館に登録されている書誌情報では、①～③のいずれも題名冒頭の「駿河表」の次の文字は漢字の「之」が使われており、前田氏が記す「へ」ではない。

しかし実物を見ると①～③のすべてにおいて、「駿河表」の次に置かれた文字は他よりも小さめの文字で、しかし中央に置かれた状態で、「え」または「之」の両方に読める手書きの文字が書かれていた。見た目からは迷うところではあるが、文法的に見た場合、駿河表に召し連れた徳川家の家来という意味のはずであるから、漢字の「之」では日本語として成立しない。従って、「え」が正しいと考えられる。また、そうであるからこそ、現代仮名の「へ」を前田氏は用いたのであろう。この点は、前述の**No.2**『駿府へ移住相願候家族人数書』で前田氏が「へ」と記していた部分が、現物では「え」であったことと共通している。

この資料は、慶應4年7月10日に新政府側から駿河府中藩に対して、「駿河江御召連相成候御家来姓名取調差出可申事」と命令されたことを受けて、藩が作成・提出した名簿であることが、前掲・杉山「徳川幕臣団の解体と静岡藩」に記されている(36頁)。そして、同論文で杉山氏は、当該資料の名を「駿河え召連候家来姓名録」と記している(同頁)。「駿河表」ではなく「駿河」の二文字のみであるが、その次の文字は「之」ではなく「え」が使われている。杉山氏も「え」を用いていることから、筆者の見立てと合致する。以上の幾つかの理由から、「え」が正しいと考えられる。

前田氏は、これを意識して、「え」を「へ」と書き換えた訳だが、そうするには相応の断り書きが必要であろう。

次に、前田氏がこの資料について、国立公文書館所蔵、または内閣文庫に原本があると記している点に関して述べる。筆者が最初に見た現物資料は③であったが、それを見た時に直ぐに気が付いたのは、表紙に「内閣文庫より」の文字があり、また名簿の最初の冒頭に池沢氏の手書き文字で「内閣文庫より」と記されていたことである。池沢氏が見たものが内閣文庫の資料であるから、前田氏もそのように記したのではないかと想像される。その場合、前田氏が見たものは、静岡県立中央図書館にある池沢氏の資料のことであり、前田氏自身が内閣文庫で見た訳ではないことになる。

それならば、前田氏が第1編で初めに、国立公文書館蔵と書いた理由は何なのであろうか。素直に読めば、前田氏が公文書館に行って、原本を見たということだが、それだと静岡県立中央図書館の池沢氏の資料を見たことを第3編で記していることとの整合性が取れない。公文書館で原

本を前田氏が見たのなら、そう記すだけで済むはずだからである。

この点の理由が分からなかったのであるが、前田氏が参考文献として記していない別の資料を静岡県立中央図書館で見ているときに、この疑問が氷解した。別の資料とは『駿遠地区移住者名簿(一)』のことで、池沢政太郎氏がまとめた手書き文書を冊子化した資料の1種である。この中に、唯一活字で書かれた冒頭部分に、池沢氏が用いた資料を紹介する箇所があり、その筆頭に、「駿河表へ召連候家来姓名(国立公文書館内閣文庫蔵)」(資料名末尾の「録」は欠けている。また「へ」が用いられている…小栗注)と置かれていた。つまり、内閣文庫は公文書館にある資料区分のことで、両者は所蔵場所としては同じなのである。恐らく、前田氏はそのことを知っていて、池沢氏が用いた原資料の所蔵場所を記しただけであって、前田氏自身は公文書館には行っていないと想像される。更にまた、資料名に前田氏が「へ」を用いたのも、池沢氏自身が「へ」を用いていることを援用したものかもしれない。しかし前田氏は『駿遠地区移住者名簿』のことは全く記していないので、これに影響されたか否かは分からない。

さて、肝心の岡田に関する調査結果であるが、この資料から分かる岡田姓の人間としては、「五十音別分類」にある通り、岡田斧五郎(10頁)から岡田五右衛門(81頁)まで合計13名があるが、岡田清直・錠次郎の情報は何もなかった。

**No.9の『静岡士族名簿』(北村氏寄贈、静岡県立(中央)図書館所蔵)**は、静岡県立中央図書館にコピーの冊子が2冊と、同図書館のデジタルライブラリーで同2点の原本が公開されていることを確認した。2つの資料とは、『静岡士族名簿 乾』と『静岡士族名簿 坤』のことである。「乾坤」は、今日で言えば「上、下」や「第1巻、第2巻」と同じ意味である。筆者は、コピーの冊子体も見たが、デジタル資料で念入りに中身を確認した。いずれもイロハ順に名前を列記しているだけの資料で、1冊に収め切れなかったために2分冊となり、その初めの部分に「乾」を、続きの2冊目に「坤」を当てたに過ぎない。従って、2冊で1セットということになる。

この資料原本には、発行時期に相当する情報は何も記されていないが、静岡県立中央図書館に登録されている情報によると、出版年は「[明治6年～明治13年]」であると大括弧付きで表示されている。括弧付きながらも、そのような時期を示せるのは何故かについては、説明がないので何も分からない。

岡田姓の人物は「乾」の方に収録されていた。すべて列記すると、「岡田善道」「岡田克一」「岡田 武」「岡田義徴」「岡田 愛」「岡田三郎」「岡田貴政」「岡田政孝」「岡田本和」「岡田正脩」「岡田美章」「岡田貞次」「岡田泰行」「岡田敬之」の14名である。ここには岡田清直・錠次郎の

情報はなかった。

以下の**各種官員録、職員録**は、資料名や出典等から**No.10～17**の8種類に分解できたので、それぞれについて調査した結果を順に記す。但し、これに関して、前田氏が第3編59頁で、「明治期の各種官員録 明治五年から明治十九年まで 写 静岡県立中央図書館」と記した部分がある。この表記では、どの資料のことであるかを特定できないので、以下の**No.10～17**の中には加えなかった。その代わり、静岡県立中央図書館に所蔵されている「官員録」の全部について調べられる限り調べた。多種の資料になるので、その結果については、別に扱うこととした。表1の**No.127**の所に置いたものがこれであり、結果もそこで示す。

**No.10の「静岡藩職員録」**については、前田氏が第3巻の中で、「同方会誌四五」掲載」と記しており、『同方会誌』45掲載のものに限定できるので探すのは容易である。『同方会誌』については、後掲の**No.34**の所で示すように、筆者は復刻版の同誌を全て調査している。このうち、復刻版『同方会誌 第七巻』（平成23年9月20日、マツノ書店）に収められている『同方会誌』第45号（大正6年10月）に、前田氏の記す通り「静岡藩職員録 明治二年二月調」が掲載されており、それを確認した。しかし、この中に岡田清直・錠次郎の情報はなかった。

**No.11の「静岡県官員録」（「静岡県史」）**は、浜松市立中央図書館の蔵書で確認した。これも「静岡県史」に掲載されているものに限定できる。但し、前田氏は「静岡県史」としか記していないが、『静岡県史』は本編と資料編から成り、その数も多い。本編で官員録の類がそのまま掲載されることはないので、資料編に掲載されている可能性が高いと考え、それを調べた。資料編だけでも29冊あり、全てを見たが、資料編16（前掲『静岡県史 資料編16 近現代一』）に目的の資料が収められていた。同書の320～321頁に「5 静岡県官員録（明治6年）」が収録されている。冒頭の「5」は掲載順を示す番号に過ぎないので、これと、括弧書きの時期の情報を略して、資料名だけを引用したとすれば、前田氏が記したように書くことができる。ただ、収録されている資料について「静岡県史」とだけ記すのは、何十冊もあるうちのどれであるかが分からず、再検証しようとする人に余計な労力を掛けるので不親切である。

この官員録には岡田姓の人物として、「権中属 十一等」の中に「庶務 岡田宣友」が、「権少属 十三等」の中に「聴訟 岡田透」と「同 岡田政徳」（この「同」は「正租」を指す）の名があるのみで、岡田清直・錠次郎の名はなかった。

なお、この『静岡県史 資料編16』には、資料名は異なるが同類の資料と言えるものとして、他にも「83 静岡

藩職員録（明3・3月末）」（105頁以下。同書の注記にある通り、これは「静岡御役人附」のことである）、「10 浜松県官員録（明6年）」（326頁以下）、「32 静岡県職員録（明11・5月）」（355頁以下）があり、これらの中には岡田錠次郎、岡田清直の情報が見つかるが、前田氏の記す「静岡県官員録」ではないので、ここでは説明は省き、後の**No.56**の所で、『静岡県史 資料編16』所収の資料から分かる事柄を紹介する。

**No.12の『官員録』『改正官員録』（「西村隼太郎編輯」）**は、国立国会図書館に西村隼太郎編による「官員録」が多数登録されており、デジタルコレクションでも幾つも公開されている。このうち、筆者はまず、デジタルデータで公開されているものの中で最も古い資料である明治7年のものを見た。国会図書館デジタルコレクションに登録されている情報の冒頭にある永続的識別子で示すと info:ndljp/pid/779236 にあたるもので、詳しい書誌情報を記すと、西村隼太郎編『官員録 明治7年毎月改正』（出版：明治7-10、出版者：西村組出版局）となる。ここにある出版年の「7-10」は、7年10月の意味ではない。現に、この資

表3 官員録(西村)の調査結果

No.	検索結果に出てくる情報	永続的識別子	浜松県	静岡県
1	官員録 明治7年毎月改正 西村隼太郎 編 西村組出版局	info:ndljp/pid/779236	×	×
2	官員録 明治8年11月改正 西村隼太郎 編 西村組出版局	info:ndljp/pid/779237	×	×
3	官員録 明治8年12月改正 西村隼太郎 編 西村組出版局	info:ndljp/pid/779238	×	×
4	官員録 明治9年2月改正 西村隼太郎 編 西村組出版局	info:ndljp/pid/779239	×	×
5	官員録 明治9年4月 西村隼太郎 編 西村組出版局	info:ndljp/pid/77924	×	×
6	官員録 明治9年4月改正 西村隼太郎 編 西村組出版局	info:ndljp/pid/779240	×	×
7	官員録 明治9年5月 西村隼太郎 編 西村組出版局	info:ndljp/pid/779242	×	×
8	官員録 明治9年6月 西村隼太郎 編 西村組出版局	info:ndljp/pid/779243	×	×
9	官員録 改正明治9年6月 西村隼太郎 編 西村組出版局	info:ndljp/pid/1086573	×	×
10	官員録 明治9年8月 西村隼太郎 編 西村組出版局	info:ndljp/pid/779244	×	×
11	官員録 明治9年9月 西村隼太郎 編 西村組出版局	info:ndljp/pid/779245	浜松県 無し	×
12	官員録 明治9年10月 西村隼太郎 編 西村組出版局	info:ndljp/pid/779246	浜松県 無し	×
13	官員録 明治9年11月 西村隼太郎 編 西村組出版局	info:ndljp/pid/779247	浜松県 無し	×
14	官員録 改正明治9年11月 西村隼太郎 編 西村組出版局	info:ndljp/pid/1086591	浜松県 無し	×
15	官員録 明治9年12月 西村隼太郎 編 西村組出版局	info:ndljp/pid/779248	浜松県 無し	×
16	官員録 明治10年3月 西村隼太郎 編 西村組出版局	info:ndljp/pid/779249	浜松県 無し	×
17	官員録 明治10年4月 西村隼太郎 編 西村組出版局	info:ndljp/pid/779250	浜松県 無し	×
18	官員録 改正明治10年4月 西村隼太郎 編 西村組出版局	info:ndljp/pid/1086605	浜松県 無し	×
19	官員録 明治10年5月 西村隼太郎 編 西村組出版局	info:ndljp/pid/779251	浜松県 無し	×

料実物の奥付にあたる部分には「官許／明治七年／毎月改正」（「／」は小栗が付したもので改行を意味する）と記されているだけで月の表記はない。従って「7-10」は7年から10年の間を意味するものと解釈するしかない。デジタルコレクションに出てくる西村の官員録は明治10年までのもので構成されているが、その全ての出版年が同じ表記になっている。

前田氏の記録によれば、岡田清直は明治6年に浜松県権少属・浜松第三大区長を任命されているので、明治6年の官員録があれば、それで確認したい所であるが、ここで確認できる一番古いものが明治7年のものであったので、まず、これを見た次第である。

この資料の124丁から「浜松県」の官員リストが始まるが、次の125丁までで終わるので重要人物しか掲載されていないことが分かる。その中に、「少属」の「岡田治興」と、「権少属」の「岡田良一郎」の名前はあがるが、岡田清直・錠次郎の名はなかった。岡田清直は明治6年に岡田良一郎と同じ権少属であったはずであるが、岡田良一郎の記録はあっても、岡田清直はここには掲載されていない。恐らく、岡田清直がその任を解かれた後の明治7年にまとめられた官員録であるが故に、清直の名は残らなかったであろう。また、念のため浜松県以外に静岡県の部分についても確認したが、岡田清直・錠次郎の情報はなかった。

同じ要領で、国会図書館デジタルコレクションで確認できる西村隼太郎による「官員録」を全て調べた。「改正官員録」の名前では、検索で該当する資料は見つからなかったため、表3に示す19種類が全てである。上述の明治7年のものも含めて表示した。表の中で「×」を記したところは、岡田清直・錠次郎に関する情報がなかったことを意味する。結局のところ、全てに「×」が付いた。西村による官員録について、筆者が調べられた限りでは、岡田に関する情報は何も得られなかったことになる。なお、浜松県が途中で無くなっているのは、元の静岡県と合併し新しい静岡県に再編されたためである。

更に補足すると、表3のうちNo.5のものは、寺岡寿一編『明治初期の官員録・職員録 第三巻』（昭和52年11月1日、寺岡書洞。静岡県立中央図書館蔵）にも収録されている。前田氏はこれを見た可能性もあるが、もしそうであるならば収録書名を記すべきであろう。

ところで、もし西村による官員録が他にも存在し、なおかつそこに岡田の情報があって、それを前田氏が見たということも可能性としては否定できない。当時の官員録が県内の顯職だけを列記するレベルのものであることから、岡田清直・錠次郎が掲載される可能性は低いと想像できるが、それでも無いと断定することはできない。西村による官員録は、他には絶対に存在しないと断言することは出来ないし、前田氏が見たものが何年のものかを特定できない現状では、当該資料の未知の部分から岡田の情報が得られる余地は残っていると云わざるを得ない。そのため、今回の筆

者の調査によって完全に白黒が付いた訳ではないことを付言しておきたい。前田氏が、西村による官員録のどれを、どこで見たのかを特定できるように明確に記してくれていれば、このような未知の可能性を考慮する必要はなくなるが、そうっていない為に筆者は苦勞させられている訳である。後に再調査しようとする者を苦しめないためにも、書誌情報は丁寧に記すべきだと、今回の調査を通して痛感させられている。以て他山の石とすべきであると思ったが故に、田中清玄の聴取書に関するレポートを昨年記した次第である。

**No.13 の『補珍明治官員録』**は、同名資料の所蔵を探ることができなかった。そのため、この資料については現在の所、未確認のままであるとしておきたい。但し、「補珍」ではなく「袖珍」の2文字を冠する本ならば、江戸時代にも明治時代にも普通に存在している。袖珍は小型本を指す呼称だからである。もし、「補珍」は前田氏の誤記で、「袖珍」が正しいのならば、小型の明治官員録ということになる。しかし、「袖珍明治官員録」の名称では、どこにも所蔵を確認することができなかった。

その代わりに「袖珍官員録」なら多くの資料を確認できる。例えば、静岡県立中央図書館で「袖珍官員録」を検索すると、『袖珍官員録 明治5年3月20日改 司法省』が1件だけがヒットする。貴重書扱いの資料のため、閲覧するだけでも特別の書類を書く必要があったが、実物を確認したところ、それは明治5年発行当時の実物であった。但し、司法省の部分のみで、名簿の本体は僅か8丁分しかなかった。掌からはみ出る大きさではあるが、懐中に入れられる程度の小ささであった。そこには岡田清直・錠次郎の情報はなかった。

また、国立公文書館の収蔵資料から「袖珍官員録」を検索すると、①『職員録・明治六年一月・袖珍官員録改』と②『袖珍官員録』のタイトルで登録されている2件を確認でき、いずれもWEB上で中身を見ることが可能である。①は表紙に「明治六年一月改」「官員録」と手書きで、その次の扉部分には「明治六年一月改」「袖珍官員録」と本文と同じ木版の刻印文字で記されているが、「職員録」の文字は表紙にも本体にもどこにもない。「官員録」を「職員録」と誤って登録したものと思われる。奥付には「官板」「御用御書物所」、日本橋通「須原屋茂兵衛」、芝「和泉屋市兵衛」の文字がある。見開き画像で248コマに及ぶ厚い冊子である。②は表紙に「袖珍官員録 内務省」、本体1枚目冒頭に「内務省」「明治七年七月五日改」、の文字が活字で記されている。奥付はない。公文書館の登録情報には発行時期に関する記録は記されていないが、改訂時期が分かるので明治7年7月頃のものだと推定できる。また表紙には「内閣文庫」の登録情報を記した紙片も貼付されている。こちらは全39頁の薄い冊子である。これら①②には、岡田清直・錠次郎の情報はなかった。

更に、沖縄県立図書館の貴重資料デジタル書庫で公開されているものとして、『袖珍官員録〔明治四年〕』（和泉屋市兵衛、明治4.8〔「.8」の意味は、表紙に「八月」の文字があるので明治4年8月と分かる…小栗注〕）と『袖珍官員録〔明治6年〕』（和泉屋市兵衛、明治6.1〔表紙に「明治六年一月十三日」とある…小栗注〕）の2種がある。後者は上記①と同一のもので、前者はそれより2年前のものになる。これらにも岡田清直・錠次郎の名はなかった。

以上は「袖珍官員録」の名で、単体で存在する資料の例であるが、これらとは別に、単体ではなく、集成本のような資料の中に影印の「袖珍官員録」が収録されているケースがある。寺岡寿一編『明治初期の官員録・職員録 第一巻』（昭和51年5月20日第一刷発行、昭和54年3月1日改訂第2刷発行、寺岡書洞。静岡県立中央図書館蔵）の後半には、省ごとに纏められた明治4年10～12月の「袖珍官員録」が10件以上収められているし、同書・第二巻（昭和52年6月1日第一刷発行、昭和55年3月1日改訂第二刷発行、寺岡書洞。静岡県立中央図書館蔵）も同様に、最初の百頁程を費やして明治5年正月20日改の「袖珍官員録」が収録されている。なお、上述した静岡県立中央図書館所蔵の単体としての『袖珍官員録』も明治5年のものであるが、それは3月20日改であるから、これとは版を異にする。

これらの『明治初期の官員録・職員録』に収録されている「袖珍官員録」も筆者はすべて確認したが、岡田清直・錠次郎の名はどこにもなかった。

更になお、前田氏が記す資料名から「袖珍」を省き、「明治官員録」だけの名称にすると、国立国会図書館に多数の所蔵を確認できる。そのうち、デジタルコレクションで公表されている資料の中で、最も古いものは明治12年刊の『明治官員録』であった。同図書館の登録書誌情報で示すと、大崎清重編『明治官員録』（1879年、出版者・山口安兵衛）である。筆者はそれをデジタルデータで見たが、静岡県の部分には要職者の記載しかなく、岡田清直・錠次郎の情報はなかった。なお、翌明治13年のものは、沖縄県立図書館の貴重資料デジタル書庫で公表されており（『明治官員録〔明治13年〕』大崎清重編、山口安兵衛出版、1880年3月）、それも見つかった。これも前年の資料と同じで、岡田に関しては何も情報がなかった。更に、神戸大学附属図書館・住田文庫所蔵の『明治官員録』（西村隼太郎編輯、明治9年6月改正）が国文学研究資料館の近代書誌・近代画像データベースで公表されていることを知り、それも確認した。ここには「浜松県」と「静岡県」の官員リストが収録されていたが、要職者を記すのみで、岡田清直・錠次郎はなかった。

以上のことから、「袖珍官員録」と「明治官員録」は存在を確認し、筆者が確認できた範囲内では、これらの資料には岡田清直・錠次郎の情報がなく明らかなにされた。

しかし、「袖珍明治官員録」や、元々、前田氏が記して

いた「補珍明治官員録」、あるいは「補珍官員録」は存在を確認できなかった。

従って前田氏は、資料名を誤って記したと考えられるけれども、それでは正しい資料名は何かということが残念ながら特定することができない。仮に筆者が調べた「袖珍官員録」か「明治官員録」のいずれかが正しいとしても、それぞれが多数存在しているので、どれのことであるのかを絞れない。何年の発行なのか、誰が編集、出版したのか、どこにそれがいいのか等の情報が少しでも書かれていれば、特定する手掛かりになるのだが、前田氏は何も記していない。その結果、氏が記した参考文献を正確に再検証することができず、誠に残念である。もっとも筆者が調べられなかっただけで、実際に「袖珍明治官員録」、または前田氏が記した通りの「補珍明治官員録」が存在しているのかもしれない。その可能性も否定はしないが、限りなく低いのではなかろうか。

**No.14 の『静岡県学事関係職員録』**については、静岡県立中央図書館に『静岡県学事関係職員録』が18件所蔵されているものの、前田氏が記す県教育新誌社（第1編）または静岡県教育新報社（第3編）によるものは1つもなかった。静岡県内の他の図書館の蔵書でも同じであった。また、前田氏が見たものは明治31年のものであると第3編に記されているが、静岡県立中央図書館の蔵書で一番古いものは大正10年のもので、明治のものはない。

これに対して国立国会図書館デジタルコレクションでは、「静岡県教育新誌社」による該当資料が1点あり、WEB上で見ることができた。そこに登録されている書誌情報を示すと、三輪木藤太郎編『静岡県学事関係職員録』（静岡県教育新誌社出版、明治28年2月）である。但し、筆者はこの画像データの全てを見たが、編者の三輪木の名も、教育新誌社、明治28年2月の文字も、どこにも記載がなかった。もしかすると、画像が暗く、文字が潰れて見えなくなっていた表紙と裏表紙のどこかに、それらの情報があるのかもしれない。なお、画像1コマ目の右下に「明治廿八年一月三十一日調」の文字があるから、ここから類推して、出版は早くても2月とされたのかもしれない。前田氏が見たという明治31年の静岡県教育新誌社による静岡県学事関係職員録よりも3年古い、それでも一番近い資料である。

この資料の中には岡田清直・錠次郎に関するものはなかったが、岡田姓の人物は以下の通り多数の掲載があった。すなわち、静岡県尋常中学校の助教諭兼舎監「岡田 正」（5頁）、沼津高等小学校の准訓導「岡田鑑二郎」（25頁）、御殿場高等小学校の訓導「岡田鍊一郎」（同）、中河内尋常小学校の訓導「岡田 周」（32頁）、不二見南尋常小学校の准訓導代用「岡田廉一郎」（35頁）、葉梨尋常小学校の准訓導「岡田憲一」（43頁）、加茂尋常小学校の訓導「岡田米吉」（62頁）、見付尋常小学校の訓導「岡田いう」（75

頁)、有玉尋常小学校の准訓導代用「岡田守典」(同)、白脇尋常小学校の准訓導代用「岡田九平」(79 頁)、西浜名尋常高等小学校の訓導(校長)「岡田武平」(81 頁)、伊佐見尋常小学校の准訓導代用「岡田定五郎」(83 頁)、奥山尋常小学校の訓導(校長)「岡田省三」(85 頁)、の 13 名である。このうち御殿場高等小学校の岡田鎌一郎の名を見た時は、岡田錠次郎の息子であると判明している岡田鎌太郎のことかと思い、一瞬、息が詰まった。「鎌」「太」の二文字が違っているので、明らかに別人であろう。

元より岡田清直が掛川小学校の校長であったのは明治初めであるから、明治 28 年や 31 年の資料にそれが掲載されるはずもなく、該当資料が見つかっても期待できないと想像できていたが、その通りの結果となった。

**No.15 の『静岡県職員録』**は、今日でも作成されている文献のため膨大な数の資料が存在するので、前田氏が記す、①**古郡万吉**、②**神谷源太郎**、③**小池直次郎**(第 3 編で前田氏は「直太郎」と記しているが「直次郎」が正しい)の 3 名の編者で限定する必要がある。但し、刊行年について前田氏は何も記していないので、前田氏が見た静岡県職員録を時期から限定することはできない。

このうち①については、国立国会図書館デジタルコレクションで古郡万吉の『静岡県職員録』を 2 点確認することができる。2 点の違いは発行時期で、1 つは明治 28 年 1 月 28 日出版、いま 1 つは同年 10 月 14 日出版である。いずれも印刷所は共益社である。また、資料現物の末尾には共に「著作者兼発行者」として古郡万吉の名が記されているが、デジタルコレクションの登録情報では、「著者 古郡万吉 編」「出版者 古郡万吉」と記されている。このうち出版者名にある「万吉」は誤記である。実物の末尾には「万吉」の文字しかないので、「古」が正しい。また、実物では彼の名は「萬」が用いられているが、新字体にすれば「万」なので、これは誤記ではない。

これらの資料からは、用行義塾関連の人物である日向謹作について、久努村の助役としてその名が記載されていることを確認できた(1 月刊の 54 頁、10 月刊の 49 頁)。しかし岡田清直・錠次郎の情報はなかった。

さらに静岡県立中央図書館にも、古郡による『静岡県職員録』が現物で 2 点所蔵されており、これらも確認した。この内の 1 点は明治 28 年 1 月 28 日出版のもので、上記の国会図書館所蔵のものと同じである。いま 1 つの方は国会図書館に所蔵されていないもので、明治 29 年 3 月改正(明治 29 年 3 月 27 日出版)のものである。著作者兼発行者が古郡萬吉(同図書館の登録情報では「フルゴオリ バンコ」と読み仮名を付している)、印刷所が共益社である点は他と共通している。ここにも岡田清直・錠次郎の情報はなく、

以上、①について筆者が確認できたのは、明治 28 年発行のものが 2 点、明治 29 年発行のものが 1 点の計 3 点である。もっとも、古郡による静岡県職員録が他に刊行され

ていた可能性と、それを前田氏が見た可能性はあり得るが、刊行時期について前田氏は何も記していないので、具体的に何が正解であるかを確認する方法がない。このことは、次の②③についても言えることである。そこで、①に関して筆者が調べられた限りでは、岡田の情報は何も得られなかったという表現で記録を残しておきたい。著者が調べられた限りでは、という限定は、次の②③も同じなので、初めにここに記すことで、以下では記述を略す。

②については、国会図書館デジタルコレクションで 2 点の所蔵を確認した。他では所蔵を確認できなかった。2 つの違いは出版時期で、1 つは明治 30 年 6 月改正のもの(明治 30 年 6 月 29 日出版)、いま 1 つは同年 11 月改正のもの(明治 30 年 12 月 4 日出版)である。その他の情報は奥付に、「発行兼著作者」として「神谷源太郎」が、印刷所として「中遠日進社」が共に記されている。これらにも岡田清直・錠次郎の情報はなかった。

③については、静岡県立中央図書館に 2 点の所蔵があることを確認したが、他では蔵書を見つけれなかった。静岡県立中央図書館にある資料は、いずれも「編輯兼発行人」が小池直次郎で、「印刷所」が「小池商店活版部」のものである。住所が同じなので、小池直次郎は小池商店の主であると思われる。2 点の内容は、1 つ目が、明治 33 年 9 月 20 日調(目次の次の本体 1 頁目冒頭)、明治 33 年 10 月 5 日出版(奥付)のものである。表紙の下部には「小池商店発兌」とあり、小池商店は印刷所としてだけでなく、発行元でもあることが分かる。2 つ目は、明治 35 年 7 月 28 日調(目次の次の本体 1 頁目冒頭)、明治 35 年 8 月 5 日発行(奥付)のものである。こちらは図書館によってハードカバー製本されており、1 つ目にあった元の表紙が欠けている。その代わり、扉部分に「静岡県庁及関係名簿 明治 35 年現在」と書かれた手書きラベルが貼付されている。しかし、ハードカバーの背文字には「静岡県職員録 明治三十五年七月調」とある。本体 1 頁目には「静岡県職員録」とあるので、手書きラベルの名前ではなく、背文字の名前の方が正しいと言える。同図書館の登録資料名も「静岡県職員録 明治 35 年」となっている。③については、以上の 2 つを確認できたが、これらにも岡田清直・錠次郎の情報はなかった。

**No.16 の『静岡県職員録』(「静岡市史」掲載ほか)**は、「ほか」の文字があるために、「静岡市史」に掲載されているものとは別に他の資料があり、それも参照したように読める。しかし、「ほか」とだけ記されても探しようがないので、ここでは他の資料は無視することにした。

『静岡市史』については、磐田市立中央図書館に蔵書があり、そこで確認した。静岡県職員録が掲載されている同書の正確な書誌情報を記すと、『静岡市史 近代史料』(昭和 44 年 4 月 1 日、編集発行・静岡市)である。この本の 418 頁以下に「〔一四〕職員録」(抄録)が収録されている。

冒頭の表紙に当る部分(写真)に「明治十二年十二月二十七日調」と手書きで記され、さらに活字の表題として「静岡県職員録」と記されている。ここから『静岡市史』に掲載されている「静岡県職員録」は、この部分であると特定できる。筆者の調べでは、これ以外に『静岡市史』に掲載された静岡県職員録はないので、前田氏が見たものもこれであると考えられる。ちなみに、この「職員録」自体の末尾の奥付部分には、明治12年12月30日発行、編輯兼印刷・太田千彦、発兌・堤醒社、とある。

この資料からは、君沢郡・田方郡の項に郡長として岡田直臣(423頁)が、佐野郡・城東郡の項に郡長として岡田良一郎(424頁)の2名が岡田姓の人物として確認できるが、岡田清直・錠次郎の情報はなかった。

**No.17の「官員履歴」(「明治初期の静岡県史料」または「明治初期静岡県史料」第1巻・静岡県史料刊行会)**は、後掲の**No.57**の所で紹介するので、そちらを参照して頂きたい。後述するように、収録書の正しい名は『明治初期静岡県史料』であり、前田氏が第1編で記した資料名中にある「の」は不要である。前田氏も気付いたようで、第3編では「の」が削除されている。この資料の第1編に官員履歴に相当する資料が収録されており、岡田清直の浜松県時代の経歴がそこに記されている。清直の経歴を含め、詳細は**No.57**の所で示す。なお、岡田錠次郎については、この官員履歴からは何も情報を得られなかった。

**No.18の『明治維新人名事典』(昭和56年、吉川弘文館)**は、浜松市立中央図書館の蔵書を見た。編者は日本歴史学会で、発行時期の詳細は昭和56年9月10日である。ここには岡田清直・錠次郎の情報はなかった。

**No.19の『幕末維新人名事典』(昭和53年、学芸書林)**も、浜松市立中央図書館の蔵書で確認した。奈良本辰也の監修により、昭和53年4月10日に発行された資料である。ここには岡田清直・錠次郎の情報はなかった。なお、浜松市立中央図書館では同名の別資料が存在していた。宮崎十三八・安間明男編『幕末維新人名事典』(1994年2月20日、新人物往来社)がそれである。出版社も発行年も違うので、前田氏が参照したものではないことは確実であるが、ここにも岡田清直・錠次郎の情報はなかった。

**No.20の『日本現今人名辞典』(明治33年、同辞典発行所)**は、国立国会図書館デジタルコレクションに蔵書があり、それで確認した。但し、同名の辞典は国会図書館デジタルコレクションの中に3種あった。違うのは発行年である。一番古いものが1900年(明治33年)刊行のもので、これが前田氏の見たものである。他は1901年(明治34年)刊、1903年(明治36年)刊である。この資料は発行年が特定できているので、筆者は明治33年のものだけを

確認した。1つが膨大な厚さの本なので、労力を減らす為にも、そのような対応をした。

同書は、奥付の情報によると、明治33年9月30日に発行され、著作兼発行者は日本現今人名辞典発行所、編纂者主任は田中重策である。ここにも岡田清直・錠次郎の情報はなかった。

**No.21の『日本現代人名辞典』(大正元年 中央通信社)**は、はじめ筆者の調査ではどこにも所蔵を確認できなかった。そこで、前田氏が記す書誌情報に誤りがあり、検索しても見つけれないのかもしれないと考え、似た名称の文献で、同時代のものを探した。すると、『現代人名辞典』であれば、同じ名の出版社から出されたものが1件のみ存在することが判明した。それは国立国会図書館デジタルコレクションでも見ることができる。古林亀治郎の編(編輯兼発行者)によるもので、中央通信社から明治45年6月27日に発行されている。

同書は人気を博したものと思われ、同じ書名で再版が発行されているが、再版の発行は大正元年11月30日である。そのことを筆者は、『明治人名辞典』(上・下巻の2巻組)(1987年10月5日復刻第1刷発行、1988年5月9日復刻第2刷発行、日本図書センター)巻頭の「凡例」で知った。この本は復刻時に『明治人名辞典』と名を変えているが、中身は『現代人名辞典』そのものなのである。そこには「本書の底本は、古林亀治郎編輯兼発行者の『現代人名辞典』再版本(大正元年十一月三十日、中央通信社)で、明治四十五年六月二十七日発行の初版本より収録人数が約四百人多い」とある。

明治45年は7月30日に明治天皇が崩御し、同日から大正元年7月30日となったので、明治45年と大正元年は西暦では同じである。従って、大正元年11月は、明治45年6月の5ヵ月後に当たる。半年も経たないうちに増補の形で再版が出た訳であるから、大きな反響があった人名辞典であったことが伺える。

従って、前田氏が見たものが、大正元年に再版された『現代人名辞典』であるとしたら辻褄が合う。唯一、整合しないのは、前田氏が「日本」の2文字を書名に冠していることである。前田氏が記すように「日本」の2文字を冠した別の人名辞典が、同じ年に、同じ出版社から発行されていたとしたら、それを見たということで前田氏は間違っていないことになる。しかしながら『日本現代人名辞典』と『現代人名辞典』の2種類を、同じ年に同じ出版社が発行することは経済合理性から見て考え難い。「日本」の文字は、前田氏が誤って記したのではないかと筆者は考え、『現代日本人名辞典』が正しい名称であったと推測している。もしかすると、前田氏が本に資料名を列記した際、この資料の1つ前にある『日本現今人名辞典』の「日本」の2文字に影響されて、資料名を誤記したのかもしれない。但し、筆者の調査では、前田氏が記す『日本現代人名辞典』

は絶対に存在しないと切り切る証拠も見出せていないので、あくまでも筆者による推測という限定付きの上で、『現代人名辞典』の情報をここに記しておくこととしたい。

『現代人名辞典』は、初版の明治45年のものを国会図書館デジタルコレクションで、再版の大正元年のものを復刻版『明治人名辞典』（静岡県立中央図書館蔵）で筆者は確認した。そこには、岡田姓の人物は「岡田意一」から「岡田亮之」まで何人もの情報が記載されていたが、岡田清直・錠次郎については何も情報がなかった。

**No.22 の『明治過去帳』（昭和46年、東京美術）**は浜松市立中央図書館の蔵書で確認した。より正確な書誌情報を記すと、大植四郎編『明治過去帳 物故人名辞典』（昭和46年11月20日新訂初版発行、東京美術）となる。昭和46年刊行の本書は新訂の復刻版であり、底本は私家版として昭和10年に発行されたものである。ここにも岡田姓の人物は何人も紹介されているが、岡田清直・錠次郎の情報は何もなかった。

**No.23 の『大正過去帳』（昭和48年、東京美術）**も浜松市立中央図書館の蔵書を見た。稲村微元を編集代表とする編集陣により作られ、昭和48年5月13日に発行されている。前田氏が記す書誌情報と同じである。ここにも岡田清直・錠次郎の情報はなかった。

**No.24 の『大日本人名辞書』（昭和19年、大日本人名辞書刊行会）**は磐田市立中央図書館および袋井市立袋井図書館の蔵書で確認した。前田氏は刊行年を昭和19年と記しているが、恐らくは戦後の復刻版を見ているに違いない。現在、各図書館に普通に配架されているものは、昭和49年に講談社が復刻版として出版したもので（その経緯は復刻版第1巻冒頭の「復刻版刊行の序」を参照）、その奥付の発行年月日の所には、最初に田口卯吉が本書の初版を出版した明治19年の日付が記されている。前田氏は明治19年の部分を昭和と間違えて記録したのではないかと想像される。もっとも昭和19年にもこの辞書が刊行されていて、前田氏が見たのはそれである可能性もないわけではない。しかし昭和49年に復刻が出たのは、その当時において既に本書が入手困難になっていたからであり、昭和19年版を前田氏が見た可能性は低いのではなからうか。いずれにしても、『大日本人名辞書』の題名の書は1種類しかないので、筆者が見た戦後の復刻版でも中身は同じであるから、復刻版を調査しても何も問題はない。

正式な書誌情報（復刻版）を記しておくとして、『大日本人名辞書』は第1巻から第5巻までの全5巻本で、奥付の内容は5巻とも全て同一である。それによると、本書の発行に関する情報は、明治19年4月15日初版発行、昭和12年3月20日増訂11版発行（これが復刻版の底本）、昭和49年8月28日第1刷発行、の3種類が記されている。最

後の昭和49年のものが復刻版の発行日である。袋井図書館の蔵書はここまでしか記されていないが、磐田市立中央図書館の蔵書は第2刷発行日の昭和50年3月1日までが記されている。著作者は大日本人名辞書刊行会、発行所は講談社である。第1～4巻までは人名辞書の本体で50音順に並べて収録されている。第5巻は年表、系譜、索引等の情報だけがまとめられている。

このうち「岡田」は第1巻（「アーカミヤ」まで収録）に収録されているが、そこには岡田清直・錠次郎の情報はなかった。第5巻の索引でも「岡田」姓を全て確認したが、やはり岡田清直・錠次郎の情報はなかった。

- (2) 樋口雄彦「静岡藩士の割付をめぐって」（『静岡県近代史研究』第36号、2011年、所収）74頁
- (3) 杉山容一「徳川幕臣団の解体と静岡藩」（東北史学会『歴史』第123号、2014年10月、所収）47頁
- (4) 同上

（本稿は2020年2月26日に提出。読者の指摘を受け微修正した原稿を5月7日に再提出。次年度掲載稿（その3）に続く）